

第2回・夏休み自然観察記録コンクール

伊達佐重

だて・すけしげ
1932年三笠市生まれ。
学芸大学札幌分校卒業。
三笠市立教育研究所所員。
空知教育研修センターで植物の講師を20年間務める。
栗山植物観察会顧問。

当協会では、北海道新聞社、北海道新聞野生生物基金との共催、北海道教育委員会の後援を得て、第二回「夏休み自然観察記録コンクール」を行い、全道の小・中学生に呼びかけて作品を募集した。

課題は次の通りである。

小学生 身のまわりの自然をよく見て作文や絵に詳しくかいてみよう。

中学生 身近な自然を観察してまとめよう。

今回は小学生百十四点、中学生十一名の応募があった。前回と同じく道新の紙面に数回載せて頂いたことに対し、この紙面をかりて改めてお礼を申し上げたい。会報NCで紹介をし、道内二十市町村教育長宛にも募集要項を送付し、各市町村への周知を依頼した。

○審査には次の方々が当たった。

依 浩三(道自然保護協会会長)

佐藤 謙(副会長)

鮫島惇一郎(自然環境研究室主宰)

三浦 二郎(樽前自然教育研究所主宰)

伊達 佐重(道自然保護協会常務理事)

福地 郁子(同)

布施 俊幸(道新野生生物基金事務局長)

入賞者及び優秀作品の発表を十月四日の道新紙上で行った上、在学する小・中学校へ名簿、賞状、副賞(図書券)を送った。あわせて学校長に対し、全校生に朝会や放送などの場を利用して伝達の間を持って頂きたいとの依頼文を送付した。

○入賞者は次の通りである。

小学生 (★は絵の作品)

金賞 石井 慧(札幌市立手稲宮丘小学校四年)

銀賞 伊藤明日香(恵庭市立若草小学校五年)

西野 萌子(札幌市立山の手小学校五年)

銅賞 千葉 結美(札幌市立手稲東小学校四年)

佐藤 将海(土幌町立西上音更小学校四年)

小野絵里佳(函館市立本通小学校二年)

佳作 茂木 彩葉(帯広市立柏小学校六年)

古田真喜子(札幌市立北園小学校五年)

角谷 瞳(美唄市立中央小学校四年)

内藤 寧(札幌市立大谷地東小学校四年)

井上 直輝(札幌市立緑丘小学校四年)

田中 素(帯広市立森の里小学校四年)

重枝 弥(札幌市立東白石小学校四年)

宮本 暁(札幌市立緑丘小学校三年)

山谷 学(函館市立駒場小学校二年)

福山 元気(伊達市立伊達小学校一年)★

中学生

銅賞 武田 友子(教大附属札幌中学校一年)

石井 智(同一年)

佳作 リート・ブラウニング

土門 薫(同一年)

(同一年)

審査を終えて

大変な根気と努力

夏休み自然観察記録コンクールに参加して下さった小中学生の皆さん、身近な自然を描いた楽しい絵や素晴らしい観察記録を送ってくださってありがとうございました。今年は七十四の小、中学校から百十九点の応募がありました。見せていただいた作品の感想をのべてみます。

小学生では、石井慧さんの「庭にひそむクモたち」が全体の組み立てと内容が群を抜いていたので、金賞としました。

観察しながら記録し続けていくのは大変な根気と努力がいるのですが、二年生に力作がありました。小野絵里佳さんの「ペランダにタマゴを生んだはと」と山谷学さんの「アゲハの観察」がそれです。生き物の行動を丹念に追い続けてきちんとまとめていました。

【資料1】

	学年	応募者数	入選者数
小学校	1年	15	1
	2年	24	2
	3年	11	1
	4年	35	8
	5年	15	3
	6年	4	1
	計	114	16
中学校	1年	8	4
	2年	0	0
	3年	3	0
	計	11	4

【資料2】

	金	銀	銅	佳作
小学校	1	2	3	10
中学校	0	0	2	2
計	1	2	5	12

三、四年生では、実験の前に予想を立ててから始め、結果をくわしく整理していた西野萌子さんの「オジギソウの運動について」が優れていました。ほかにも、千葉鮎美さんの「水クラゲの観察」や佐藤将海さんの「クワガタムシっておもしろい」が独創的な考え方で取り組んでいました。

五、六年生では伊藤明日香さんの「サンショウウオの研究」と古田真喜子さんの「いろいろな土の酸性度調べ」が、参考書を上手に利用しているのが光りました。

中学生の金賞、銀賞は、残念ながら該当する優れた作品がなく見送りました。当たり前のことですが、ただ見るのと「書くために見る」のとは、大きな違いがあります。ぼんやり、うっかり見

てしまうと、まとめの時に後悔します。数字や図やグラフに置きかえたり絵で文を補ったりして、工夫すると、見やすく楽しい記録に生まれ変わります。自分も楽しみにながら研究できたら最高ですね。また来年も、このコンクールに参加してください。

(一九九五年十月四日付の北海道新聞より転載)

第2回

夏休み自然観察記録
コンクール

- 募集テーマ/◆小学生 身のまわりの自然をよく見て、作文や絵に詳しくかいてみよう。
◆中学生 身近な自然を観察してまとめよう。
- 応募資格 道内に在住する小・中学生。
- 応募規定/◆小学生の作文は自由な規格。小学校低学年は毎日記ふうなまとめ方でもよい。絵は画材、用紙、大きさ自由。応募の例として(1)作文だけ(2)作文と絵(3)絵だけなど自由。
◆中学生は400字詰の原稿用紙5枚程度に書き、二つ折りにしてとじ込む。
◆応募用紙は作文(表)にも絵(裏)にも一枚目だけに張る。(題、住所、氏名、学校名、学年を明記して下さい)
◆作文はページ番号、絵には順序を示す日・月・番号を入れる。
- 応募先/〒080 札幌市中央区北3条西11丁目加藤ビル5 6F (社)北海道自然保護協会 ☎011-251-5465
- 締め切り/1995年9月10日(日)必着(郵送が持参)
- 入賞者の発表/10月下旬までに北海道新聞紙上で入賞者を発表し、本人または在学する小・中学校へ名簿を発送します。
- その他/応募作品は返却しません。優秀作品は北海道新聞および自然保護協会の広報紙などに掲載します。

賞	
小学生の部/金賞 1名 (賞状、図書券7,000円)	
銀賞 2名 (賞状、図書券5,000円)	
銅賞 3名 (賞状、図書券3,000円)	
佳作10名 (賞状、図書券1,000円)	
中学生の部/金賞 1名 (賞状、図書券10,000円)	
銀賞 2名 (賞状、図書券7,000円)	
銅賞 3名 (賞状、図書券5,000円)	
佳作5名 (賞状、図書券3,000円)	



主催/ (社)北海道自然保護協会、北海道新聞社、
(財)北海道新聞野生生物基金
監修/ 北海道教育委員会

(北海道新聞1995年7月20日)

優秀作品紹介

※絵と作品は一部抜粋

小学生の部

金賞

庭にひそむクモたち (抜粋)

札幌市立宮丘小四年 石井 慧

ヒメグモのたまごのへん化

7月28日



たまごが2こになつていた。さうから見つけたたまごの色は、うすい、つやがあった。

8月3日



赤ちゃんがたくさん生かしている。白く、ぽくぽくとおこしている感じがした。しんぷをまたえたら、ワシワシワ、55は、こいたが、すぐもと、こえた。

8月4日

虫めがねで見た。



あいがわらず上の方にたまご、いた。少し大きくなつて、いると思う。

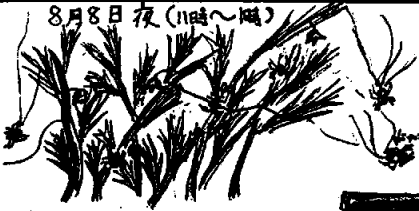
8月8日 朝



足まとは、きり見えた。少し黒、ほくなくなつて、いた。

たまごは、ななくきの方に、子どもが、集まっていた。たまごは、しわしわ、こいた。

8月8日夜(11時〜1時)



子グモが草の上に向、こい、しうけんめい登っていた。一番高い所、糸を出し、風に乗、こ飛んで、いた。(夜中なので、ビデオでお母さんに、こ、こもら、た)

8月9日



草の上の方やまん中の方、に、たくさん、の糸、細い糸が、のこ、こ、いた。敵、いき、のこ、こ、いた。

観察してわかったこと

クモの数や種類は、ぼくのそうぞうよりも、ものすごく多かった。ぼくの家の庭だけでもたくさんいるので、外はもっといると思う。巣は、えものがよくかかりそうな所をえらんで張られているのがわかった。クモは、えさをかみくだいて食べていると思うけど、どくをまわして、すつていることがわかった。巣とえさのかんけいは、つこうのいいようにできた。ぼくの知らないは、つこうのいいようにできた。ぼくの知らないは、つこうのいいようにできた。ぼくの知らないは、つこうのいいようにできた。

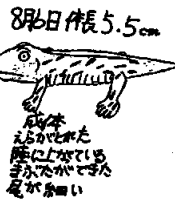
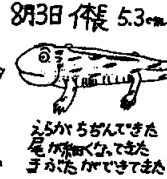
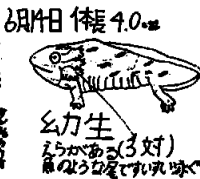
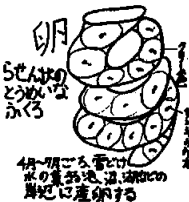
銀賞

サンショウウオの研究 (抜粋)

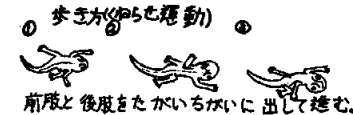
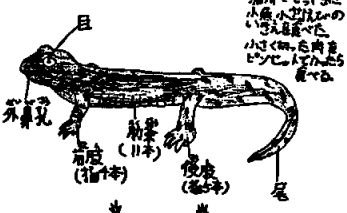
恵庭市立若草小五年 伊藤明日香

サンショウウオの研究

伊藤 明日香



エゾサンショウウオの体



北海道にいるサンショウウオは、エゾサンショウウオとキタサンショウウオです。エゾサンショウウオは、北海道全域、キタサンショウウオは、釧路、十勝、帯広、キタサンショウウオには、せながた、金色の、すじが、あつ、ます。わたしは、観察したのは、恵庭市の、増川上流、に、いた、エゾサンショウウオです。

観察のまとめ

1. 卵

四〜七月ごろ、雪どけ水の集まる池、湖などの岸辺に産卵する。

2. 幼生

三対のえらは、こきゅうをするためにある。魚のような尾ですいすい泳ぐ。

3. 成体

尾が細く、まぶたがある。水の中では生活できない。

※ 体長が5cmぐらいになると、幼生から成体に変態する。

4. かい方

えらがちぎんできたなら、陸を作ってやる。水そうは、日光の当たらないすずしい所におく。えさは一日おきにやる。きちんとふたをしめる。二か月くらいえさを食べなかつたら、つかまえた場所にてがしてあげる。

※ くらうしたところ

ふたをしていてもにげるので、ガムテープをまいてにげられないようにした。

いきえを好むので、えさをとりに行くのがたいへんだった。

研究を終えて

最初は、黒っぽくてぬるぬるしているサンショウウオを気持ち悪いなと思っていたけれど、研究を進めていくうちにだんだんサンショウウオがかわいく思えてきました。成体を育てるのはむずかしいし、山に帰った方がうれいと思うのでまた山に帰ってあげようと思っています。

サンショウウオのことは、あまり知られていないので、おす、めすのちがいがわかりませんが、恵庭市パンジリに流れている漁川にサンショウウオがたくさん住んでいるので、みなさんも一度見に行ってみたらどうですか？

銀賞

オジギソウの運動について (抜粋)

実験のようすと結果

A オジギソウの一日 (角度は小葉の開き方)

午前 5:20	7:50	8:20	日中	午後 5:30~7:10	8:00	午後 8:10~9:10
家の外で雨にあたり、180°	外で雨にあたり、120°	雨にあたり、10°	雨が少しあつたので、10°と30°	雨は止んで、5:30~5:50の間、少し開くと、7:10~7:30の間には0°	このころから出て一本の葉のようになつた	オジギソウを2つに分けて、そのうちの1つを4時間おいておいたけれど、小葉は開かなくなつた
晴れの日 (風はあまりなし)	8:10	95°	日中	午後 5:25	5:50	6:25
170°	95°	70°~90°	一日中、風がふいて、いたせいか、180°には開かなくなつた	90°	50°	10°
あと観望しなかった。						
くもりの日	午前 8:40 5:50 5:05 5:10 5:15 5:20 5:25 5:30 5:40 5:50 6:20 7:20 7:22			午後 12:10~2:10		
0° 10° 30° 40° 50° 60° 70° 80° 90° 100° 130° 150°				150°に開いているオジギソウにあおさごす、ほりかぶせて2時間後に見ると30°に閉じていた。		

B ねっやけむりをあてた時の反のう

ローソクの火をオジギソウからはなしてあてた	せんこうのけむりに葉にあてた
3秒で0°になつた (葉はたまた)	1分間あても変化なし

C ふれる部分やふれ方のちがいがゆるした時の反のう

ふれ方	ふれ方	ふれ方	ふれ方	ふれ方	ふれ方	ふれ方	ふれ方
90°までゆっくり開いた	X	X	X	X	X	X	5~7秒で0° (大葉は小葉) 葉へいはずがなつた。

札幌市立山の手小五年 西野 萌子

わかったこと

① 小葉が開く時こくは午前五時すぎで、閉じはじめるのは午後五時三十分ごろから。それぞれ完全に開いたり閉じたりするのに二時間ぐらかかる。

② 天候によって開き方がちがって、雨や風にあたり、くもり空だとあまり大きく開かない。指などでふれた時は、小葉もすぐに閉じて葉へいもすぐに下がるけれど、雨や風などのしげんのしげきでは小葉が閉じるだけ。

③ 雨にあたって小葉が少し開いている。明るいところから、はこをかぶせて暗くすると、葉が閉じて、光が弱くなっても葉が閉じることがわかった。

感想

④ 夜、閉じた葉に光をあてても葉は開かない。しげんのじょうたいと同じようにねむったまま。

朝早く四時三十分ごろから起きたり、夜中に起きて観察するのはねむくて大変だった。オジギソウは一度閉じると元通りに開くまで十分間以上かかるので、角度をはかる時や、その他の実験をする時は、ゆるしたりさわったりしないように気をつかった。

実験したり、本で調べたりして、今まで全々知らなかった言葉や働きがわかったので、これから役に立つと思う。

ペランダにタマゴを生んだとは

函館市立本通り小二年 小野絵里佳

七月十六日

はとが ペランダに たまごを 一こ生みました。メスの色は はい色に うすいくろが まじっています。

オスは はい色に こいくろが まじっていて ちよっと 大きいです。

はとは ほとんど たまごを だきません。

ペランダの とを あけると にげて 行きます。

夜八時に はとの すを 見たら メスが たまごを だいていました。

七月十八日

学校から帰って はとの すを 見たら たまごが 二こに なっていました。

七月十九日

学校に 行くまえに 見たら メスが たまごを だいて いました。

学校から かえって すを 見たら オスが たまごを だいて いました。

夜六時ころ メスが かえってきて たまごを だきました。

オスは とんで 行きました。

七月二十日

学校に 行く前に とうもろこしを あげました。メスが たまごを だいていました。

学校から帰って見たら オスが たまごを だいて いました。

「十一時ころ メスが すから とんで いった

ら オスが もどって きたよ。」と おかあさんが 言いました。

七月二十一日

メスが 十時ころ クウクウ小さな こえで なきました。

朝十時に オスがきて こうたいしました。

メスは すから できて 羽を のばしたり 足を のばして 体そうをした あと えさを たべて とんで きました。

七月二十二日

オスが 朝 早くに むかいの家の やねにきて クウクウ ないと いました。

でも十時ころで ないと メスと こうたいしません。

オスは、十時ころから 六時ころまで たまごを だいていて、メスは 夜の六時ころから 朝の十時ころまで たまごを だいたいて たまごを だく時間が きまっています。

七月二十三日

オスが あつそうに たまごを だいていました。

七月二十五日

たまごを 二こ 生んでから きょうで 八日目です。

こうたいで たまごを だいて はなれません。

七月二十七日

オスが 子どもの はとを つれて えさをたべて いました。

子どもの はとは くびのところには色の けが かざりの ように ちよんちよんと ついて います。

きつと 親子だと思いました。

八月三日

一このたまごが われて はとの 赤ちゃんが 生まれていました。

うすい ちゃ色で くびが ふにゃふにゃして いて かわいいです。

八月四日

二こ目の はとの 赤ちゃんが 生まれました。二この たまごを 生んでから 二十日目です。

小さくて かわいいです。

八月六日

はとの 赤ちゃんが 小さな こえで ピーピー とないて います。

親の はとが オスとメスで 赤ちゃんを こうたいで だいて います。

八月八日

親のはとが ときどき すを はなれるようになり ました。

親のはとが いなかったたので 赤ちゃんを さわって 見たら あったかくて ふわふわして 小さくて かわいかったです。

八月十日

二羽の はとの 赤ちゃんが 生まれてから七日 目になったたので おとうさんが はとの足に 絵里佳と 書いた 金のわを はめました。

おとうさんが「足かん」と 書いて いました。大きくなって とんで いても ペランダで 生

まれた はとと わかるよううに 大きくなって とんで いて つか 会えたら すぐくう れしいです。

ビックリしちゃうかもしれない むねが ドキドキ しちゃう。

八月十二日

生まれて九日目です。

はとの 赤ちゃんを ティッシュを ひいてだいで見ました。

なんか ザラザラして ちょっと きもち わるかったです。

でも 頭を ゆびで なでると 目を つぶります。

かおを 見ると 小さくて かわいいです。

八月十六日

ザラザラしているところから 小さな 羽が できてきました。

ひよこぐらいの 大きさに なりました。

でも ひよこのように ピョンピョン あるけません。

ちよっと ヨチヨチして 足が ふらふらしています。

おなかが すぐと ピーピーと なきます。親が どこからか とんできて えさを やっています。

八月二十三日

あれ はとの 赤ちゃんは どこに 行ったのとおかあさんに きくと「そこにいるでしょ。」といいました。

「赤ちゃんが 大きく なんだよ。と言いました。」

絵里かは ビックリしました。

そこに親のはとが いるようでした。

羽を のぼすと せんすのように 大きく ひろがります。

よく見ると 首の ところに ちゃ色の かざり

のような けが ついています。まだ ビービーないでいて じょうずに えさを たべれません。

つづいては なんども おとして やつと口に入れます。

体は 大きく なるのが すごく早いなと思いましたが。

羽を ひろげて バタバタ やっています。

八月二十九日

羽を ひろげて バタバタ とぶれんしゅうをしています。

なんども 羽を ひろげて やつと三㎝くらい 足が 上りました。

八月三十日

朝バタバタ とぶれんしゅうを していました。そしたら いきなり バタバタと 羽を ひろげて

ベランダの上に とびました。

ベランダの たかさは一メートルありました。

九月二日

ベランダから やねの 上に とびました。

やねの 上で まわりを キョロキョロ見えています。

そして ベランダの 前の 家の やねを まい

日ながい時間見えています。

きょうで はとの赤ちゃんが 生まれて 三十日目です。

まだ とおくに とべません。でも親のはとと 大きさも えさを たべるのも

銅賞

クワガタムシっておもしろい

土幌町立西上更小四年 佐藤 将海

ぼくの家の周りには、自然がたくさんあって、いろいろな虫がいます。特に「クワガタムシ」をとるのが、ぼくの夏休みの楽しみの一つです。クワガタムシを見ていると、時間をわすれてしまうくらいおもしろいので、今年はこの、クワガタムシのひみつをさぐってみることにしました。

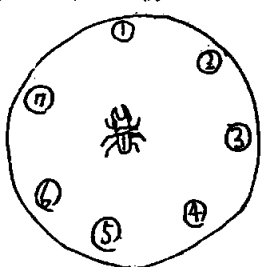
本でよく見るクワガタムシは、夜になると明るい所に集まったり、じゅ液をすっていたり、カブトムシとけんかをしたりしています。だけど本当は、「どんな食べ物が好きなんだろう?」「どれくらい力持ちなんだろう?」と、自分の目でたしかめたくなくて、ぼくは実験を始めました。

ぼくはまず、五ひきのクワガタムシをつかまえました。

- A. コクワガタ(オス・体長四・三㎝)
- B. ノコギリクワガタのあごの小さい種類(オス・体長三・三㎝)(足が一本不自由)
- C. ミヤマクワガタ(メス・体長三・三㎝)
- D. ミヤマクワガタ(メス・体長三・三㎝)
- E. ミヤマクワガタ(メス・体長二・八㎝)

「実験Ⅰ」好きな食べ物

は?
たらいの中にエサをおき、まん中にクワガタムシを入れて、どのエサに



よっていかか、一ぴきにつき三十分間ずつ観察しました。エサは ①さとう水②乳さん飲料③ケーキシロップ④バナナ⑤メロン⑥スイカ⑦おやつゼリーを用意しました。一つのエサを五分間なめ続けていたら、そのエサをとってしまい、次の行動を観察しました。

。結果

★人気のエサ ベストⅢ★

第一位 バナナ

第二位 乳さん飲料

第三位 メロン

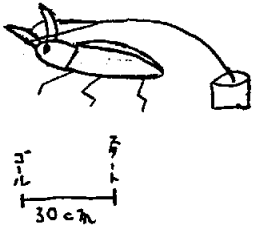
バナナにはあまり水分がないのに、一番人気だったので、とてもふしぎでした。昼と夜では行動がちがうのかな?と、昼と夜に観察したけれど、エサのさがし方はあまりかわりませんでした。
〔実験Ⅱ〕どれくらい力持ち?

重り(四gから三十二gまでのふんどうを用意しました。)をクワガタムシの大あごにひっかけ板の間を歩かせてみました。(図Ⅱ)すべる板の間でむりそうなら、歩きやすそうなジュータンの上で歩かせてみることにしました。三十センチメートル歩けたら合格です。

。結果

★力持ちくらべ★

- 第一位 Aクワガタ (板24g・ジュ32g)
- 第二位 Cクワガタ (板20g・ジュ32g)
- 第三位 Dクワガタ (板20g・ジュ28g)
- 第四位 Eクワガタ (板16g・ジュ16g)
- 第五位 Bクワガタ (板8g・ジュ8g)



Bクワガタは、後ろ足の左足がと中からないので、ほかの元気なクワガタとくらべるのはかわいそうでした。ぼくは、自分の何倍もの重さを引ければクワガタムシの力に、びっくりしてしまいました。体が大きいほど、力も強いようでした。

板の間とジュータンの上をくらべると、ジュータンの方が10g以上も重いのを引っぱるクワガタムシもいます。これは、足の先のつめをひっかけられるからだと思います。

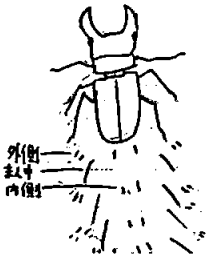
そこでぼくは、この力持ちの足のひみつをもっとさぐってみたいくなりました。

〔実験Ⅲ〕足はどうなっている?

クワガタムシの足の絵の具をつけて、画用紙の上を歩かせて、どんな足あとがつくか調べてみました。

。結果 Aクワガタは、後ろ足の足あとがしっかりと力強く、力持ちのひみつがここに

あるんだなと思いましたが、後ろ足の一部がないBクワガタは、足あともうすくて、たよりなくて、力持ちくらべの時に重い物運べなかつた理由がよくわかりました。メスも後ろ足に力強さはなくて、前足の方がしっかりとっていました。それにしても、どのクワガタムシもみんな、外側に中足のあと、まん中に後ろ足のあと、内側に前足のあとがあっ



クワガタムシの足あと



て、それもきそく正しくきれいなならんでいるのが、とてもおもしろかったです。それから、よく観察すると「右の前足と後ろ足・左の中足」「左の前足と後ろ足・右の中足」の組み合わせで、かわりばんこに動かし、歩いているようでした。

この足のおもしろさや力強さ、そして大アゴのたくましさ、クワガタムシをかくこよくしているんだなと思いました。「昆虫の王様」はカブトムシだと言われているけど、この辺りにはカブトムシがないので、ぼくにとっては、クワガタムシが昆虫の王様なのです。

今年、クワガタムシをとるのに、とても苦労しました。天気の良いのか、周りで工事をしているせいなのかわからないけれど、すごく少なくなりました。気がします。ぼくは、大好きなクワガタムシたちが、のびのびと生きていける自然を大切にしていきたいです。そして今ぼくは、つかまえたクワガタムシたちを自然にかえしてやるうと思っています。来年また、別の元気なクワガタムシたちに、合えるように!

植物調べ(抜粋)

札幌市立手稲東小四年 千葉 鮎美

「花は、何時にさき、何時にしぼむか。」
「この実験をすればこうなり、あの実験をすれば
どうなるか。」を調べるためにやりました



7月25日火曜日
(もり)

観察の花

コスモス

6時のコスモスの様子

6時 コスモスはほとんどさいてた

11時のコスモスの様子

11時 コスモスは全部さいてた

8時のコスモスの様子

8時 コスモスはしぼんだ

実験1

コスモスは、何分でしぼむか。

予想

コスモスは、30分~1時間ですぼむと
思う

け、か

コスモスは、6時間かかてしぼんだ。

実験2

コスモスは、何分を開くか。

予想

しぼんだ時と同じく、6時間で開
くと思う。

け、か

コスモスは、なんと30分で開いた!

まとめ

予想はどの方もはかれました。でも実験のおかげで早く開く
から朝さくのが早いということもかかれました。ケド、花は、
日よ時間てさたりするとお母さんが言った。

銅賞

ライラックの利用法

—地球を守るのは人間だけじゃない—

教育大附属札幌中一年 武田 友子

平成七年七月、私の所属するクラブで、ライラックの蒸散量を調べる実験をした。蒸散量とは、植物の体内にある水分が水蒸気として空気中に出る量のことである。その日は、午後二時から三時まで、天気は曇りのち晴れだった。

そして、日向は一時間に約一・八ミリリットル、日陰は一時間に一・二八ミリリットル。これがライラックの蒸散量だった。これは、いろいろな資料を調べてみると、かなり多めであることが分かった。蒸散量が多いということは、それだけ空気をきれいにする浄化作用が強いということだろう。つまり、ライラックは、環境によい木だということだ。

ところで、私の所属するクラブでは、ライラックには他の使い方はないのかということになり、いろいろ考えてみることにした。そして、以前にやった、紙作りの実験と合わせてみることにした。以前は野菜でやり、失敗してしまっただが、今度は方法を変えてやってみた。

結果は……またもや失敗に終わってしまった。今度は、方法は良かったが、ライラック自体の繊維が足りなかったらしい。

しかし、三度目の正直ということで、もう一度野菜でやってみることにした。

今度は一回目と同じ種類の野菜だったのだが、結果は大成功だった。紙作りを成功させるには、植物と方法を考えなければいけないらしい。ということ、方法さえよければどんな植物でも紙ができるだろう。例えば、台所の生ゴミで紙を作るとする。そうすれば、ゴミも少なくなり、環境にもいいかも知れない。

思いも掛けないところから環境に関することが出てきてしまったが、この二つの実験を発展させていけば、私達でも環境を守ることができるかも知れない。それに、私達だけではなく、植物も地球の環境を守っている、ということを考えていくことも大切なのではないだろうか。

銅賞

アリジゴクを観察してわかったこと

教育大附属札幌中一年 石井 智

みなさんは『アリジゴク』という昆虫を知っていますか。きつと、名前を聞いた事があったり、すりばち状の巣を連想する人はたくさんいると思います。でも、実際に見た事のある人はそんなにたくさんいないと思います。僕もこの夏休み前まではその中の一人でした。しかし、今は違います。僕は、八月五日に道民の森にキャンプに行つて登山をした時に偶然見つけました。

木がおおい茂った小道を歩いている時でした。なにやらすりばち状のくぼみがあり何匹かのアリがジタバタもがいていました。良く見てみると、アリのいる所に小さな角のようなものが二本つき

でています。僕はもしやと思ってその小さな角のようなものがある場所をそっとほつてみました。するとクワガタのような大あごをもつた小さな虫が一匹出てきました。これこそ『アリジゴク』だったのです。

僕は以前から『アリジゴク』がどうやって巣を作るのかという事に大変興味があったので絶好のチャンスだと思い、キャンプをしていた日間、ずっと観察していました。その結果『アリジゴク』は次の様に巣を作る事がわかりました。

- ① 尻の方から砂にもぐっていきます。
- ② ぐるぐると回りながらどんどんもぐっていきます。
- ③ 上にかぶさる砂つぶは、あごで外にはね上げます。

これ以外にもしろい事がわかりました。それは、『昼間は巣をつくらない』という事です。昼間は尻の部分の砂にもぐらせただけでした。

もう一つ疑問に思っていたのは『アリジゴク』の食物です。虫の液体を吸うのは知っていましたが、それ以外のものは食べるのかどうかということでした。そこで、『アリジゴク』の巣にちぎった雑草や死んだ虫を入れてみました。すると、どちらも大きなあごではじき飛ばしました。生きた虫を入れてみると、すべて上がれないうちに、大きなあごではさんでひきずりこみました。そして、カラカラに乾燥して死んだ虫を大きなあごで穴の外に放りだしてしまいました。

これは僕にとって大変貴重な体験でした。この大発見のおかげでとても有意義な夏休みを過ごせました。

『アリジゴク』の生活については、図鑑や百科

事典を調べれば同じ様な事がわかったと思います。でも、それでは全然おもしろくありません。それに、自分の目で確かめ、自分の手で実験してみた事で何だか未知の世界に足を踏み入れた様な気持ちになりました。

これは、父に聞いた話なのですが、父が子供の頃は家の庭や近所の公園、空き地などにたくさん『アリジゴク』がいてよく遊んだそうです。それが今ではどうでしょう。道路はアスファルトで固められ、たくさん建物が建ち並び、公園だって人工的に作られた物ばかりです。このような、自然があふれている所へこないで、『アリジゴク』が見られなくて当然ではないでしょうか。僕は、最初に『アリジゴク』を見た事がある人は少ないだろうかとかきました。これからは、もっと少なくなっていくてしまうのではないのでしょうか。それどころか、『アリジゴク』を知らない人まででてるのではないのでしょうか。そんな時代になったらとても悲しいと思います。今から、無りやり市街地を『アリジゴク』が住める世界にしろと言いません。でも、時には何でもいいのです。自然を目で見て、手で触って、はだで感じて欲しいと思います。そして、少しの間目を閉じて、『アリジゴク』のことを思い浮かべてほしいと思います。そして、僕たちは身の回りから、目で見ることができて、手で触ることができて、はだで感じる事ができる自然を、なくさないように協力しなければならぬと思います。

この夏は、貴重な体験をしたと同時に、いろいろなことを考えさせられました。でもきつと、『アリジゴク』は、今日も元気に虫を食べているでしょう。